

## 浴衣の男

有坂 広一

N市の郊外でアパート住まいをしていた頃のことである。

夏のある夜、寒々しい夢を見た。灰色の浴衣を着た蒼白の男が、筋張った腕で窓ガラスをトントン叩いて私を呼んでいる。年は二十四、五歳だろう。

「もしもし、もしもし……」

恐ろしさのあまり、讒言を言いながら眠りから覚めた。が、どうしたことだろう。目を開いた時も前と同じように叩く音がするので。体中に鳥肌が立った。とつさに逃げ出そうとして、ふと気がついた。なんだ、あれは昨日洗濯した浴衣が夜風に煽られてガラスを打っている音だ。私はやれやれと吐息をついた。それでも、窓の方を見るのが怖くて、落ち着かなかつたが、そのうち眠ってしまった。

翌朝、大方乾いていた。しかし気になった。この浴衣は何か訳でもあるのか、どうにも気味が悪い。不精な私がわざわざ洗ったのは古着屋で買ったからである。得体の知れない理由が潜んでいるような気がしてなら

ない。その頃、働きながら大学に通っていた学生だった。わずかな金も惜しみ、共用の流し場を利用したのだった。それはともかく、私は疑問に取りつかれていった。気持ちは収まらなくて、再びその店に行つてみることにした。浴衣の売主を探し出すためであった。しかし、簡単に名前や住所を教えてくれるだろうか。私はどうすべき考えた末に一計を案じた……

古着屋は狭苦しい路地裏にあり、猫が路上で二匹ほど座り込んで目を閉じていた。前に来た時と同じ八十代の店主がとりついで。私はできるだけ愛想をよくして、

「じつはご相談があつて、参りました」

買った品を取り出しながら事情を話した。そして大学で妖怪の研究をしている学生だと名乗った。これこそ戦略で、事実友人が所属している会であった。そして売主のことを教えてほしいと申し出たのだった。

「それは困ります」店主は渋い顔をした。

「何とかお願いできませんか」

「ダメです」

「ご本人が見えたのですか」

「代理の方でしてね。車で衣類を詰めた荷物を運んで来られました」

「その方と連絡は取れませんか」

「取れません」店主はにべもない。

そこで私はまた友人の主宰する研究会を持ち出した。「秘密は守ります。近いうちに妖怪の論文を書いて提出しなければなりません。切羽つまっています。教えて頂ければ有難いのですが」懇願した。

「そんなことが学問になるのですかねえ」店主が小バカにしたように笑った。

「はい。あり得ないような非現実的な現象から、現実を導き出すのが狙いです」

「分かりませんなあ」店主は白髪を撫でた。

「どうか、ご理解下さい。お願いします」

「法に触れますしね」

「内緒でお願いできませんか。万が一のことがあったら、責任を取ります」

「いや、無理です」

何度も同じような問答を繰り返して、別の商品を持って来て、「これも買います」と金を払うおうとした。店

主はしばらく考え込んでいた。時間が経ち、やっと口を開いた。

「学問のためなら、いいでしょう」

諦めた口ぶりで承諾した。そして代理人の名前と住所を紙片に書いて渡してくれた。

「有り難うございます。感謝します」

頭を下げて店を出た。場所はけっこう遠方で、慌ただしく地下鉄の電車に乗った。それにしても、よく教えてくれたものだ。学生の純情めいた口調に折れたのかも知れない。とにかく第一弾は成功した。三十分ほどでH駅に着いた。駅からさらに十五分ほど歩いた。

街は平屋建ての貧しげな家が建てこんでいた。皆働きに出ているのか、人々の姿はあまり見かけない。昼下がりの陽光が強く射していた。目的の家は案外早く見つかった。私はその家の前に佇んだ。壁は所々崩れ落ちて、朽ちかけており、表札には剣持辰雄という名前が刻み込まれていた。紙に書いてくれた姓と同じである。その前で考え込んでいると、主婦が話しかけて来た。

「何かご用ですか。その家には誰もいませんよ」

私はぴんときた。隣の家も剣持姓だった。「身内の方ですか」

「そうです。劍持辰雄の叔母です」

「私は古着屋の知人で、着物を研究している学生です」  
古着屋には、主人が車で荷物を運んだという。劍持辰雄は大腸ガンで亡くなった。両親も三人の子供も皆ガンで死亡したと聞いて、私はショックを受けた。

「揃いも揃って、皆ガンで死ぬなんて不幸な家ですよ」  
主婦は突き放すような口調だった。迷惑そうにも見えた。もう沢山ですと言わぬばかりに。

「おかげで、ひどい貧乏でした」

「皆がガンでは治療費もかかるでしょうね」  
「大変だったみたいですよ」

辰雄は無口で、何を考えているのか分からないような性格だったが、古代文明の研究をしていたそうだった。

「でも、死んでしまつては仕様がないわね」

四十分ほど立話をし、色々な情報が得られた。その主婦は、未つ子が死んでくれてどうか解放されたとも言った。

私は帰る道々、思いをめぐらした。あの浴衣は辰雄のものだろう。それを着て、アパートに現れたのか。何かを訴えずにはいられなかったのかな。あれは夢ではなく、実際に古代文明の研究を志していた青年に違いない。きつとそうだ。歩きながら汗ばんで来て、片

手に提げた紙袋が厄介になった。知りたいことを知ったから、こんなものはもう必要ない、川に投げ捨ててしまおうかと考えた。橋を渡りかけたら大声で誰かが叫んでいる。

「子供が溺れているぞ。助けてやってくれ」

「どこだ、どこだ」

「あそこに見えるわ」

何人かの男や女が騒いでいる。私は声の方や流れに視線をやっているうちに、すぐに子供の姿を見つけた。走って土手にかかった鉄筋のはしごを降りて行く。急いで紙袋の中の浴衣を取り出し、襟の辺りを握りしめて、流れに棹差した。間近に六歳くらいの男の子が流れて来た。

「坊や、これに掴まるんだ。早く、早く」

子供は布をしっかりと握った。

「手を放すなよ。分かったな」

私は勢いよく引つ張り上げた。大人の一人が抱いて土手上に運び、他の者達が手ぬぐいやハンカチで拭いてやっている。やがて父親が駆け付けて、車ですぐ近くの病院に運んだ。私は濡れた浴衣を堅く絞ってまた袋に入れた。

「あれッ」

いつの間にか捨てる気をなくし気持ちに変化が起こっていた。浴衣は子供を助けて役に立った。格別な、尊いものに思えて来た。大事にして取っておこう。それに、もうすぐに花火大会である。自分もこれを着て見物に行くつもりになっていた。

初稿、文学研究会報（法政大学） 昭和36年6月